



ブレインバンク
未来への希望の贈り物

編集：佐藤 諦吉
監修：加藤 忠史

はじめに ―ブレインバンクへの期待を込めて―

私がブレインバンクに関心を持つようになったのは、約15年前のことです。「ぜんかれん」誌に掲載された「つばめ会」（福島ブレインバンク賛助会）の記事を読んで、生前にブレインバンクに登録し、死んだ後には脳組織を研究してもらって、後世の精神疾患に苦しむ当事者の方々の診断や治療に役立つことができたら、と思うようになりました。しかし、「つばめ会」に登録されている方は、大半が統合失調症の方なので、双極性障害を含めたすべての精神疾患の方が登録するような全国規模のブレインバンクの設立が必要だと考えるようになってきました。

初めは、自分の脳組織が病理切片にスライスされると考えると、いくら死後に感覚はないと理屈ではわかっていても、なにかいたたまれない感じがしたのは正直なところですが、しかし、全国を精神疾患を研究する人達に自分の脳を役立ててもらい、病因や治療法を解明する礎になることを考えると、脳組織は切り刻まれても、自分は別の形で永く生き続けることができるのだと喜びを感じるようになりました。

16歳の時に双極性障害Ⅰ型を発症してから約50年間、私はこの病と付き合ってきました。治療薬にはリチウムやバルプロ酸などの気分安定薬がありますが、双極性障害を完全に治

す薬はなく、現在の医療では、ほぼ一生涯にわたって持続的に薬を飲み続けなければならぬのです。しかしブレインバンクを整備して脳組織研究を進めることができれば、画期的な治療薬や診断法を開発する上で大きなブレークスルーになると思います。

私は2011年に発行された『脳バンク 精神疾患の謎を解くために』（光文社新書）で当事者の立場から分担執筆させていただいたことがあります。その中で「ブレインバンクへの登録は、一番に当事者自身がブレインバンクの意義を充分に理解した上での強い意思により初めて可能になることで、決して研究者サイドの強い要求とか遺族の意向が優先されてはならない」ということを書きました。この信念は今でもなんら変わってはいません。私ももう60歳代後半、そして統合失調感情障害（双極型）を患う妻も70歳代となりましたので、生きていくうちにぜひともブレインバンクへ生前登録したいと考えています。精神疾患の原因の抜本的な解明のために1日でも早い全国規模のブレインバンク設立に向けて、本書がその歩みを進める一助になることを願ってやみません。

佐藤 諦吉

目次

はじめに	― ブレインバンクへの期待を込めて ―	2
鼎談	なぜブレインバンクが必要なのか？	5
ブレインバンク	献脳登録者の声とご遺族の思い	35
ブレインバンク	― 人と人をつなぐもの ―	53
佐藤さんの熱意に思う	― あとがきにかえて ―	67

鼎談

なぜ ブレインバンクが 必要なのか？



佐藤 諦吉氏



丹羽 真一氏



加藤 忠史氏

精神疾患をもつ苦しみ

双極性障害の場合

加藤忠史（以下、加藤） 佐藤さんは双極性障害でさまざまなお苦勞をされてきたと伺っています。これまでのことについて教えていただけますか。

佐藤諦吉（以下、佐藤） 私は双極性障害Ⅰ型の診断を受けています。最初に発症したのは、16歳のときでした。うつ状態で登校できず高校を留年してしまつたのですが、その後は再発することなく「ほぼ治つた」と考えていました。でも、双極性障害は薬を飲み続けないと再発するということを知らずに過ごしてしまいました。大学・大学院では化学を専攻し、その後、代謝の研究がしくて動物実験・ラジオアイソトープの実験ができる医学部で衛生学・公衆衛生学教室の助手を務めていました。学内の研究発表があつたある日、スタッフの1人とちよつとしたことで大げんかしてしまつたのです。今から思えば、そのときは躁状態だつたのでしょう。その後、急激にうつ状態になり、3カ月間ほど寝込んでし

加藤忠史
（独）理化学研究所脳科学総合研究センター―精神疾患動態研究チームチー
ムリーダー

佐藤諦吉
品川区精神障害者当事者会
年輪の会長

双極性障害Ⅰ型・激しい躁状態とうつ状態を繰り返す特徴をもつ双極性障害の一つ。

まいりました。回復後は自動車運転中に誇大妄想が出現しました。自分が偉くなったように思えて、映画の主人公のような気分で反対車線を走行し、正面衝突事故を起こしました。幸い大した事故ではなく、大怪我はしなかったのですが、車の免許を取り上げられてしまいました。

丹羽真一（以下、丹羽） それは大変でしたね。当時はどのような診断名だったのですか。

佐藤 大学病院で非定型精神病と診断されました。当時、すでに結婚して子どもがいましたから、回復後は母校の恩師に医学部生理学教室への就職を世話していただきました。しかし、思うような結果を出せず、論文を書くために徹夜して実験したりしたので、無理がたたつてうつ状態になってしまい、自殺念慮があったので3カ月ほど閉鎖病棟への入院を経験しました。退院後も少しずつ研究を続け、ようやく研究成果を学会発表することになったのですが、そのときに躁状態になってしまい、「自分は偉い」という誇大妄想が現れ、結局、社会的逸脱行為により研究職を解雇されてしまいました。研究は私の生きがいだったのでそれができなくなり、経済的にも困窮しました。障害年金だけではなかなか生活できませんし、職がないと「お前はダメだ」と社会的にレッテルを貼られ

丹羽真一

（公） 福島県立医科大学

会津医療センター精神医学講座

特任教授

非定型精神病・統合失調症や双極性障害などの典型例に当てはまらない精神病を指す。急性に発症することが多い。

社会的逸脱行為…暴言を吐いたり、粗暴な振る舞いをしたり、社会の常識から外れた行為をすること。双極性障害では躁状態のときなどにみられることがある。

佐藤さんの熱意に思う ―あとかぎにかえて―

現在、日本で精神疾患患者さんの脳組織を研究している研究者はごく少ない。これは主に、研究すべき脳が集積されていないためである。しかしながら、最終的には脳組織を調べない限り、精神疾患を解明できないことは、精神疾患を研究する者にとって、共通の認識である。本当に精神疾患を解明することを目指すのであれば、ブレインバンクを設立して脳を集積する必要があることは明らかである。そのことは政府も認識しており、2011年度には、文部科学省によりブレインバンク設立を目指した準備調査研究が行われたが、残念ながら、次の動きへとつながることはなかった。

なぜこうした動きがうまくいかないのか考えてみると、結局のところ、研究者主導で行うべき活動ではない、ということに尽きるであろう。

最も大切な身体の部分である脳を、未来の人たちが精神疾患で苦しむことのないよう、死後に提供する、という崇高な行為は、研究者が提案するような性質のものではない。精神疾患を解明してほしい、そのために死後に脳を提供したい、という当事者の声なしに進むことはあり得ないのである。

2011年5月に、佐藤さんにもご寄稿いただいて『脳バンク 精神疾患の謎を解くた

めに『(光文社新書)を出版した。それとほぼ同時にブレインバンクの準備調査研究が始まり、機運が高まっていると思ったところ、準備調査が中途にて終了し、筆者は失意の中にあつた。しかし、佐藤さんは、決してくじけることなく、ブレインバンクの講演会を行いたい、そしてブレインバンクの本を作りたい、と粘り強く活動を続けられ、ついにはこうして本が完成することとなった。

筆者が研究を志したのは、元々は心の謎を解明したい、という漠然とした動機からであつたが、臨床研修初期の双極性障害患者さん達との出会いの中で、双極性障害という病気を何とか解明しなければ、と思うようになった。

そして、研究がうまく進まず、くじけそうになつたとき、初心を取り戻させてくれたのも、佐藤さんの言葉であつた。

佐藤さんの熱意に心から敬服するとともに、本書の出版を心から嬉しく思う。

2014年5月

加藤 忠史